東北女子大学・東北女子短期大学　紀要　No.54：46～52　2015

『ハワーズ・エンド』と『最後の九月』の比較からみるフォースターとボウエンの関係性について

杉　本　久美子*

Comparing Similarities and Differences of *Howards End* with *The Last September*

Kumiko SUGIMOTO*

Key words : *Howards End*　『ハワーズ・エンド』
The Last September　『最後の九月』
Country House　カントリー・ハウス
Big House　ビッグ・ハウス
Anglo-Irish-Ascendancy　アングロ・アイリッシュ・アセンダンシー

はじめに

エリザベス・ボウエン（Elizabeth Bowen, 1899-1973）の作風について述べる時、同じ特性を持つ作家としてジェイン・オースティン（Jane Austen）やヘンリー・ジェイムズ（Henry James）といった作家と共にE･M･フォースター（Edward Morgan Forster, 1879-1970）の名もあげられる。その理由は彼らがオースティン流とも言われる写実主義者の伝統を受け継いでいるためである。ボウエンとフォースターは、20歳の年齢差があるものの、両者ともにブルームズベリー・グループ（Bloomsbury Group）のメンバーであり交流を持っていた。また彼らの作品はオースティンと同じく主に中産階級を扱ったものがほとんどであること、作品の状況設定に似たものがあることなども、ボウエンとフォースターを関連づける要因となっている。そして何よりボウエン自身がもっとも影響を受けた作家としてフォースターの名を挙げている。(1)

両作家の作品については『眺めのいい部屋』（*A Room with a View*, 1908）と『ホテル』（*The Hotel*, 1927）が比較されやすい。どちらの作品も両作家にとって初期の長編であること、イタリアのホテルを舞台にしていることなどがその理由である。しかし、フォースターとボウエンに共通する重要な要素に「家」がある。フォースターとボウエンにはそれぞれ思い入れの深い家があり、その家をモデルとした作品を残している。本論考では両者の「家」を舞台とした作品、『ハワーズ・エンド』（*Howards End*, 1910）と『最後の九月』（*The Last September*, 1929）の共通点と相違点を比較し、フォースターとボウエンとの関係性について読み解いてみたい。(2)

『ハワーズ・エンド』における「状況小説」の要素

『ハワーズ・エンド』は、イギリスではカントリー・ハウスと呼ばれる邸宅が物語の鍵となっている。この邸宅のモデルとなったのは、フォースターが幼いころ過ごした、ルークス・ネスト（Rooks Nest）と呼ばれた邸宅である。生後ほどなくして父親が死去し、彼ら親子の庇護者となったマリアン・ソーントン（Marianne Thornton）のはからいで住むことになったこの邸宅は、フォースターにとって「家」という概念の基盤となった。このルークス･ネストの面影をもつハワーズ・エンド邸は、ロンドン近郊のハーフォードシャーに位置しており、20世紀初頭のカントリー・ハウスを象徴している。さらにこのハワーズ・エンド邸を取り巻く環境は、都市化の波が押し寄せつつあるものの、田園の風景を残しており、

＊東北女子大学

古き良き時代のイングランドを象徴している。ディヴィッド・ロッジ（David Lodge）は、この『ハワーズ・エンド』について次のように評している。

> 『ハワーズ・エンド』は、いわゆる「英国の状況」小説であり、農業主体の生活をしてきた古き良き時代と、商工業の影が暗示する多難な未来とを同時に内包している有機的統一体としての田舎の雰囲気こそが、登場人物や人間関係に重要な意味を与える要素となっている。（『小説の技巧』、10）[3]

ロッジが指摘したこの「英国の状況」については、19世紀後半から、イギリスで特に意識され始めた課題であり、20世紀初頭にかけて多くの作品が世に出された。[4] まさにこの時期に出版された『ハワーズ・エンド』の中でも、当時イギリスで問題化していた社会状況が実に様々と描写されている。後にヒロインのマーガレット・シュレーゲル（Margaret Shclegel）の夫となるヘンリー・ウィルコックス氏（Henry Wilcox）や彼の長男チャールズ（Charles）が乗りまわす、埃をまきちらしながら猛スピードで走る自動車は、鉄道に代わる乗り物として、新時代の到来を象徴している。[5]

ウィルコックス氏は「帝国西アフリカ・ゴム会社」（the Imperial and West African Rubber Company）という名の、帝国主義と資本主義経済の恩恵を受けて成長した会社の経営者である。彼の会社に貼られている、西アフリカにおける会社の勢力図は、植民地政策によって繁栄をとげた大英帝国の勢力図にほかならず、ウィルコックス氏はマーガレットの言う「ど根性」（grit）によって帝国主義と実社会を動かしてきた人々、実利主義者を象徴している。そしてその下に位置する人物がレナード・バストである。

バストは作品の中で「この男はおそらく三代目、つまり文明に誘われて都会にやってきた羊飼いか百姓の孫にあたるだろう」（122）と描かれている。この「三代目」（third generation）という表現には、従来の上流階級や中産階級そして労働者階級とは別の、当時都市部に急激に増加した下層中産階級を意味している。彼の肩書きはポーフィリオン火災保険会社の事務員であるが、20世紀初頭、事務員は郊外の裕福な農夫より収入の少ない、下層労働者階級と違わない生活をおくっていたのが実情である。彼を取り巻く状況は「灰色」（grey）という表現と共に描かれることが多い。これは、バストの暗澹たる人生を表しているとともに、急速な近代化によって悪化したロンドンの環境をも表している。

19世紀に始まった都市化と工業化の影響により人口は増大し、大気汚染は深刻化した。環境整備が不十分なため、ゴミは悪臭を放ち、廃棄物や下水がテムズ川に流れ込んだ。大気の煤を吸って霧は黒ずむ程だったため、この劣悪な生活環境は「有害な気体」として表現されるようになった。都市部に住む人々は新鮮な空気を求めてハイド・パークやロンドン郊外へと出かけるようになり、都市部の公園や郊外は「ロンドンの肺」と表現されるようになった。『ハワーズ・エンド』の13章でロンドンが息をする有機体のように描かれているのは、このような都市事情によるものである。バストが都市移住者の子孫であり、ある日、郊外を夜通し歩くといった小さな冒険に挑んだという設定には、知的好奇心だけでなく当時の社会風潮を含んでおり、「三代目」という表現には都市移住者たちによる新たな階級の現状が反映されていると解してよいだろう。

『最後の九月』における「状況小説」の側面

『最後の九月』は、1920年頃のアイルランドを映し出している。ダニエルズタウン（Danielstown）と呼ばれるイギリスではカントリー・ハウスにあたる、アイルランドのビッグ・ハウスを中心に物語は展開する。この邸宅のモデルとなったのは、ボウエンが最後の当主となった「ボウエンズ・コート」（Bowen's Court）である。ダニエルズタウンの所有者であるネイラー家をはじめ、この邸宅

に集う人々はボウエンと同じアングロ・アイリッシュ・アセンダンシー（Anglo-Irish-Ascendency）と呼ばれる人たちである。イングランドからの移住者であり、プロテスタントとして、また地主として支配階級に位置したアングロ・アイリッシュたちの置かれた状況には、複雑なものがあった。エリザベス一世の治世から続くイングランドとアイルランドとの抗争は、二〇世紀に入ってもその火種は絶えることがなく、アイルランド人によってアングロ・アイリッシュはかつての支配者に他ならなかった。特に1845年に始まったジャガイモ大飢饉が支配者階級とその権力を象徴したアングロ・アイリッシュたちに、経済だけでなくその後の存亡へと関わる大きな打撃を与えた。100万人単位の死者を出したこの大飢饉は、天災ではなく、むしろ食糧供給の失策による人災だとして、アイルランド人たちは連邦政府と彼らと結託した地主階級に対して反発するようになり、やがて民族主義運動へと発展した。『最後の九月』設定年代である1920年頃は、この激しい民族主義運動のさなかにちょうど該当する。作品の中でも、1916年の反乱やR.I.C.（Royal Irish Constabulary）、Black and Tan、IRAなど、当時の情勢を表す直接的表現が使用されている。またドリーン・ハーチガン（Doreen Hartigan）はV. A. D.の資格を持っていること、ダヴェントリー氏（Mr. Daventry）は戦争神経症（shell-shock）にかかっていることなどから、イングランドとアイルランドとの抗争の他に、第一次世界大戦の影響をも窺わせる内容となっている。さらに注目すべきは作品の中で描かれるビッグ・ハウス襲撃事件である。実際に20世紀初頭アイルランドで頻発した事件であり、ボウエンも後に彼女の所有となるボウエンズ・コートもその危険性に襲われている。[(6)]『最後の九月』ではビッグ・ハウスとアングロ・アセンダンシーを取り巻く緊迫した社会情勢が直接的に描かれている。

このように『ハワーズ・エンド』と『最後の九月』には、当時のイギリスとアイルランドの社会情勢が色濃く反映されていることがわかる。出版時期と設定時期が1910年と1920年頃という10年ほどの違いがあり、イギリスとアイルランドという設定場所の違いはあるものの、カントリー・ハウスとビッグ・ハウスを取り巻く社会は過渡期を迎えていたことがわかる。では両作品のテーマにはどのような特性と相違があるのだろうか。

『ハワーズ・エンド』のテーマ

ヒロインのマーガレットは、妹のヘレン（Helen）、弟のティビー（Tibby）と共に不労働収入をもとに暮らしている。シュレーゲル（Schlegel）という名からもわかるように、亡き父はドイツ人で、帝国化したドイツを嫌ってイギリスに帰化した経緯がある。シュレーゲル家は音楽や絵画を好み、また一家の中心はマーガレットであることから女性を主体とし観念性を重んじる特性を持っている。一方でシュレーゲル家の相対する家族としてウィルコックス（Wilcox）家がある。意志を表すウィル（will）と雄鶏を意味するコックス（cocks）の組み合わせを連想させるこの名前の通り、ウィルコックス家はシュレーゲル家とは間逆の特性を持ち、ヘンリーを中心とした男性主体の実利主義的生き方をする一家である。「この物語はひどい貧乏人には用がない。」(58)という半ば辛辣な作者の直接的言及の通り、両家とも中産階級に属している。ヘレンとウィルコックス家の次男ポール（Paul）との恋愛騒動、そしてウィルコックス家の中で家族と特性の違うウィルコックス夫人がマーガレットにハワーズ・エンド邸を譲りたいとメモを残して病死したことにより、物語は展開していく。夫人の意思は残されたウィルコックス家の人々によって一旦は反故にされてしまう。このハワーズ・エンド邸には、ルークス・ネストの面影が込められていることは既に述べたが、さらにこの邸宅は作品の中で「この屋敷はイギリスの屋敷であり、窓から見える楡の木はイギリスの木なのだ」(206)と描かれており、ハワーズ・エンドはカントリー・ハウスとしてだけでなくイギリスそのものを表象していると解してよいだろう。

従って、ハワーズ・エンドの後継者問題とは、

言い換えるならばイギリスの継承者は誰なのか、と同義になる。この後継者に関する問題は、『最後の九月』でも取り上げられており、両作品に共通するテーマの一つである。

『最後の九月』のテーマ

『最後の九月』で描かれる登場人物たちは、『ハワーズ・エンド』と同じく中産階級の人々である。物語の中でネイラー夫妻（the Naylors）の子どもに関する描写はなく、夫妻の庇護を受けているヒロインのロイス・ファーカー（Lois Farqure）と、同じくダニエルズタウンに滞在しているロレンス（Laurence）が、夫妻の子どものような立場として描かれている。まだ成人に成りきっていないロイスの心の葛藤とヒューゴ（Hugo）への淡い恋心、そしてジェラルド（Gerald）との恋愛を通して、大人へと成長していくロイスの心理的覚醒過程を描いている。またこの作品についてボウエンはアメリカ版の序文に制作にあたってのエピソードを記しており、この作品に「回顧録」としての側面を与えたことやヒロインと自身との関連性について言及している。さらに『最後の九月』では、ビッグ・ハウスを取り巻く緊迫したアイルランドの社会状況と、その状況から遊離しているアングロ・アイリッシュ文化の対比も描き出されている。またダニエルズタウンに集う登場人物たちも、同じアングロ・アイリッシュであるものの世代によって価値観が違う。12年ぶりに再開したフランシーから見るネイラー夫人の性格は全く変わらないもので、彼女の描写にはneverという表現が繰り返し使われている。（16-17）またゴシップを気にするフランシーに対してネイラー夫人は「あえて気づかないようにしている」（78）と述べていることなどから、ネイラー夫人が象徴するものは、アングロ・アイリッシュの「変化しない」、「気づかない」側面である。フランシーの夫であるヒューゴと第２部から登場するマーダ・ノートン（Marda Norton）はロイスやロレンスたちよりも年上であり、ネイラー夫人世代とロイスの世代の中間に位置する世代である。ヒューゴはカナダ行きを目指していたものの、結局は実現することなく妻と共にダニエルズタウンに滞在している。ヒューゴはいつも何かを成し遂げることはなく、フランシーに依存しているが、その事実に気づいており不満を抱いているフランシーもあえて彼に忠告するようなことはない。

マーダはこの作品のアングロ・アイリッシュたちの中で、もっとも快活な人物として描かれている。マーダについての描写には「明るい様子」（lightest look）や会話に帯びる素早い反論（a lightning attack）など「明るさ」を印象づけるためにlightという表現が付随される場合が多い。しかし、マーダも「気づかないでいることの他に、私たちにできることはあるのかしら。」（117）と述べるなど、アングロ・アイリッシュの負の特性に気づいてはいるものの、ヒューゴと同様にあえてそれを変えようとはせず、現状に甘んじている。よってヒューゴやマーダの世代は、ネイラー夫人世代の黙認や現状維持の他に、甘受や諦めといった姿勢を見ることができる。

そしてヒロインのロイスはダニエルズタウンで最も若い世代である。ネイラー夫人世代を第一世代とすると、ロイスやロレンスは第三世代となる。ロイスは最も若い世代にも関わらず、結婚することでネイラー夫人たちの世界、いいかえるならば旧来のアングロ・アイリッシュたちの世界に繋がりたいと考えている。ロイスの両親は他界しており、ネイラー夫妻の庇護下にあるためからか、彼女は常に自分の居場所を求めている。[(7)] ロイスたちが過ごしているダニエルズタウンでは、アイルランド人やイギリス人を招いたテニスパーティーが開かれるなど、緊迫する社会情勢とは遊離した、「気づかない」生活が続けられている。この生活は長年続けられてきたことが、テニスパーティーの様子に如実に表されている。見失ったテニスボールを捜している際、少年が見つけたボールは「それは戦前のものだ」（55）とロレンスが述べており、戦前から同じような生活を過ごしてきたことがわかる。だがその一方で、穴のあいたテニスコートのネットなどはそのままにされ

ている様子などから、衰退の影は着実に彼らの世界に入り込んでいることが読み取れる。

衰退の影は、邸宅の後継者に関しても同様である。『最後の九月』ではネイラー夫妻の子どもは描かれておらず、ダニエルズタウンの直接的後継者は存在しない。よってネイラー夫妻の姪と甥にあたるロイスとロレンスがこの邸宅の後継者的存在となる。ロイスは旧来のアングロ・アイリッシュの世界に帰属したいと願いながらも、自分の将来に漠然とした不安を抱いており、この邸宅と自分の置かれた状況に関して、「まるで繭の中にいるよう」(66)、「瓶に閉じ込められた蠅みたい」(83)と述べていることから、彼女にとってダニエルズタウンは「保護」と「閉塞」の両面をもった世界であると読み取ることができる。彼女はイギリス人将校のジェラルド（Gerald）と「結婚しなければならない」(I must marry him.) と思い込んでおり、自分の立場や本当の気持ちに気づいていない。ロイスの心理や葛藤は作中で描かれる「光」や「影」と連動するように描き出されている。マーダや脱走兵との遭遇・発砲事件そしてジェラルドとの恋愛を通して、彼女の覚醒過程が描写されている。

このように見ていくと、両作品の表層上の共通点は、カントリー・ハウスないしビッグ・ハウスといった「家」を舞台にしていること、主な登場人物は「中産階級」であり、家および登場人物は「過渡期」を迎えていること、そして両作品において「継承」の問題が描かれていることである。それでは両作品の相違点にはどのような意義があるのか。

両作品の相違点

ハワーズ・エンドではウィルコックス夫人には３人の子どもがいるため、形式上の後継者は存在している。しかし、あえて部外者であるマーガレットに邸宅を譲りたいとしたウィルコックス夫人の遺言は、ウィルコックス家の中に真の後継者はいないことを示唆したものといえる。この後継者に対する問いかけをフォースターは次のように読者に直接的に投げかけている。

> 一体全体魂の所有物に相続なんてことが考えられるのか？魂に子孫なんていうものがあるのか？楡の木や葡萄蔓や露をおいた干し草の束―こういったものに対する熱情を、血のつながらぬ者につたえることができるものなのか。(107)

作者のこの直接的介入からもわかるように、ハワーズ・エンド邸が象徴するイギリスの精神性を継承する者はいったい誰なのか、というテーマをこの作品は常に問いかけ続ける。物語は終盤にかけて、バストの死に関しチャールズが有罪となり、ウィルコックス氏の信条は崩れ、マーガレットに助けを求める。そしてマーガレットとウィルコックス氏、ヘレンと彼女とバストの間にできた赤ん坊の４人がハワーズ・エンド邸で暮らす場面で最終章は終わる。第一章と同じく干し草の収穫期を迎え、互いに価値観の異なる者同士が共に暮らし、彼らを繋ぐあらたな希望としての赤ん坊が描かれていることから、ハッピー・エンドと読み取ることもできる。しかし、フォースターはこの光景に、迫りくる近代化の波の象徴である、建築音も書き入れている。問いかけに対する明確な答えはなく、将来への希望と不安をそのまま読者に提示している。

一方、『最後の九月』では、ネイラー夫人がはっきりしたルーツを持たないイギリス人のジェラルドと由緒あるアングロ・アイリッシュのロイスとの結婚は認められないとして、彼女と別れるようジェラルドに提言する。[8] さらに夫人からロイスはジェラルドを愛しているとは思えないと言われた際に、強く否定できなかったジェラルドはロイスに別れを告げる。その後ジェラルドは襲撃され射殺される。ジェラルドとの心的別れ、そして物理的別れを経て、ロイスは自分の本心に気づきフランスへと旅立つ。最終章、ネイラー夫妻のみとなったダニエルズタウンは近隣のビッグ・ハウスとともに焼き討ちにあい、炎上して作品は終わる。第一章ではネイラー夫妻とフランシーと

ヒューゴたちとの再会が、幸せに満ちた秋の光景と共に描き出されているのに対し、最終章では、同じ場面でありながらも、ネイラー夫妻が闇夜のなかで燃え盛る邸宅を見つめる場面となっている。

ネイラー夫妻やヒューゴ、マーダといった世代は旧来のアングロ・アイリッシュの特性をおびていることは既に指摘した。そしてこの特性を認識していた一番若い世代のロイスとロレンスがダニエルズタウンから旅だったという展開には、自ら「繭」を出たのであり、これまでのアングロ・アイリッシュの生き方とは違う、「変化」を遂げたことを意味している。また第一章と最終章の場面が反転している理由として、ボウエンがあげた「回顧録」としての側面を考えるべきであろう。アメリカ版の序文でボウエンはこの作品は最も思い入れの深い作品であると述べ、また「回顧録」としての側面を与えたことを記している。よってボウエンは最終章でダニエルズタウンを炎上させたのには、実体験に基づくインスピレーションだけでなく、この邸宅の存在を強烈に印象づける意図があったと考えられる。事実この暗転の効果には、邸宅が無に帰したことで、逆にその存在が浮かび上がり、読者に作品冒頭の幸福にみちた邸宅を思い起こさせるものがある。

このように『ハワーズ・エンド』と『最後の九月』には多くの共通点があるものの、『ハワーズ・エンド』では「イギリスを継ぐ者は誰か」という問いが続けられるのに対し、『最後の九月』では後継者について読者に対ボウエンからの直接的な問いかけはなされていない。また『ハワーズ・エンド』は最終章において第一章へと回帰するような展開であるのに対し、『最後の九月』では暗転していること、さらには近代化の波に飲み込まれる不安要素を抱えつつも、ハワーズ・エンド邸は残されているものの、ダニエルズタウンは緊迫する社会情勢に飲み込まれる形で、焼失しているという違いがある。

フォースターとボウエンおよび２作品の比較で見えてくるもの

再びロッジの言葉を借りるならば『ハワーズ・エンド』は英国の状況を描いた作品である。英国が直面している状況とこれから直面するであろう状況をそのまま提示しているところに、この作品の「状況小説」としての役割とフォースターの現実主義者としての側面が窺える。問題の解決方法を提示することがこの作品の役割ではなく、英国の抱える問題を見せることに意義があった。

『最後の九月』もアイルランドの状況小説といって過言ではないだろう。しかしダニエルズタウンを取り巻く環境は、『ハワーズ・エンド』でカントリー・ハウスが直面していた状況よりも、さらに過酷で切迫した状況であり、『ハワーズ・エンド』で描かれた希望とは程遠い、跡形もないほどまでに劇的な終りかたである。だが『最後の九月』が目指したのは、文字どおりにダニエルズタウンが迎えた最後の至福の時間を読者の記憶にとどめることであり、そこにはボウエン自身の記憶を閉じ込める意図もあったといってよいだろう。『ハワーズ・エンド』と『最後の九月』を通して見るフォースターとボウエンとの関係性には小説のスタイルだけでなく、両作家のバック・ボーンにおいても相関性が窺われ、今後さらに検証していく必要性があるだろう。

注

(1) Oliver Stallybrass. Ed. *A Passage to E. M. Forster*: Aspects of E. M. Forster: Essays and Recollections written for his ninetieth birthday 1st January 1969. (London: Arnold, 1969) p.12.

(2) 本論文ではE. M. Forster, *Howards End*. (London: Penguin, 1989) および Elizabeth Bowen, *The Last September*. (New York: Anchor, 2000) を使用し、本文中の引用ページはこの版による。また訳文については小池茂訳『ハワーズ・エンド』(東京、みすず書房) 1994 年。を参照した。

(3) David Lodge, *The Art of Fiction*. (London: Penguin,1992) p.10　訳文については柴田元幸、斉藤兆史訳『小説の技巧』(東京、白水社) 1997 年。

を参照した。

(4) 1889年から1903年にかけてチャールズ・ブースの『ロンドン市民の生活と労働』が出版され、また1909年C・F・G・マスターマンが『英国の状況』を出版し、ベストセラーとなった。

(5) 自動車について『最後の九月』では、ダニエルズタウンを取り巻く緊迫した状況を象徴するものとしてトラックが描かれている。

(6) ボウエンはElizabeth Bowen, *Bowen's Court.* (New York: Knopf, 1942) p.403において1921年に父親から、ボウエンズ・コートの近隣のビッグ・ハウスが襲撃されたとの知らせを受けたこと、そしてボウエンズ・コートもその危機にあると知った際、邸宅炎上という着想を得た、と記している。

(7) ロイスは作品のなかで、自分は「気づかれない存在」であることに焦燥感を抱いており、自分の存在を示したり、また居場所を探すような言動をとる傾向にある。とくにロイスがmustという表現をよく使うところに、彼女の思い込みやすい性格をみることができる。

(8)『ハワーズ・エンド』においてバストが「この男はおそらく三代目、つまり文明に誘われて都会にやってきた羊飼いか百姓の孫にあたるだろう」と記されている点と、ジェラルドもネイラー夫人に一族について聞かれた際、サリー州あたりに散らばっていると述べており(262)、自分のルーツを明言できないところに、作品における両者の役割には類似したものがある。

参考文献

Bowen, Elizabeth. *Bowen's Court & Seven Winters* (London: Vintage, 1999).

---.*Collected Impressions.* (London: Longmans, 1950).

---.*The Mulberry Tree: Writings of Elizabeth Bowen,* Ed. Hermione Lee. (London: Vingo, 1980)

Ellmann, Maud. *Elizabeth Bowen: The Shadow Across the Page* (Edinburgh: Edinburgh UP, 2003).

小野寺健『E. M. フォースターの姿勢』東京：みすず書房、2001年。

山根木加名子『エリザベス・ボウエン研究』東京：旺史社、1991年。

風呂本武敏『アイルランド・ケルト文化を学ぶ人のために』京都：世界思想社、2009年。